



かながわの天狗伝説

春の古刹に天狗の足跡を訪ねて

天狗住んで斧人ラシメズ木ノ茂リ

正岡子規



最乗寺を抱く山林では、創建当時から杉の植林と保護が続けられ、現在では樹齢350年から500年の巨木が多く、幹周り7m、高さ45mのものまであります。この杉林の中を、仁王門から境内まで「天狗の小径(こみち)」という歩行者専用道が造られています。

令和8年3月発行 ● 発行人 片岡達也 ● 編集人 利根山邦夫 ● 発行 公益財団法人はまぎん産業文化振興財団 〒220-8611 横浜市西区みなとみらい3-1-1 ☎045-225-2171(直通) ㈱神奈川新聞社



かながわの

天狗伝説

あかかほせ 高い鼻、
やって 八手の団扇を一振りすれば岩をも砕く神通力。

鬼か変化か、はたまた神か。神奈川の天狗伝説を追いました。

取材協力 最乗寺 建長寺 / 構成・文 福田敬道 藤井賢治 /
デザイン 小山下紀子 / 撮影 小林輝久

大雄山最乗寺、奥の院への石段。

天狗とは、中国の『史記』や日本の『日本書紀』で、轟音を立てて落ちる流れ星を不吉な存在として天狗(テングまたはアマツキツネ)と呼んだものが始まりです。

日本の天狗は、平安時代から山岳信仰の修験道と結びつき、山の霊的存在として認識される一方『今昔物語』では、仏法を妨げる魔縁として登場します。

それ以降の天狗の存在について、神奈川県立歴史博物館の図録『天狗推参!』にはこう書かれています。

「いつしか天狗は異形と習合する。權威を帯びて魔界に転生した天狗は、傲慢なる異形でもあり、その異質さをあ

らわす最たるものが長く大きな鼻というわけだ。中世末期は社会秩序の大転換—いわゆる下剋上—があった時代もある。異形として畏れ、崇められていた存在は、既成の秩序が動揺するなか、人々によって歪められ、抑圧され、いつしか滑稽な性格をも付与された。」そして「江戸時代になると、人々にとって天狗はもはや畏怖の対象ではなく霊験ある神に変化した。」

このように善悪の両面で語られながら、日本人の精神文化に深く根付いてきた存在、それが天狗です。

マイウェイでは天狗の逸話を求めて二つの寺院を訪ねてみました。

大雄山最乗寺



修行僧を見守る天狗

最乗寺は、南足柄市と箱根町にまたがる明神ヶ岳の中腹に位置する曹洞宗の古刹です。

開創は室町時代の應永元(1394)年で、永平寺・總持寺の曹洞宗兩大本山に次ぐ格式を誇ります。

最乗寺が建つ急峻な山あいには、10万本以上の老杉の巨木が立ち並び、靈氣満山にみなぎり「関東屈指の靈域」と呼ばれるにふさわしい風情です。そしてここで研鑽を積む修行僧を600年以上も見守ってきたのが最乗寺の天狗みょうがくろう妙覚道了みょうがくどうりょう大薩埵だいさつだです。

了庵慧明禪師が開創

最乗寺を開創した了庵慧明禪師は、相模国糟谷さくや(現・伊勢原市)に生まれました。若年から円覚寺(鎌倉)などで修行し、西国さいごく(現在の兵庫県南東部)の永澤寺えいさくじで通幻寂靈禪師つうげんじやくれいぜんじに入門します。やがて通幻禪師の十大弟子の筆頭となり、總持寺祖院(石川県能登)の住職などを歴任した後、57歳で相模国へ帰り、小田原の上曹我に庵を結びました。ある日、一羽の大鷲が大事な袈裟をつかんで飛び立ち、明神ヶ岳山中の大松のてっぺんに袈裟を掛けて置きます。了庵禪師が松の木の下で坐

神通力で伽藍を造営

禪を組んだところ、たちどころに袈裟が肩に戻ったことを啓示として、この靈山に寺院の建立を決意しました。

一方、妙覚道了みょうがくどうりょう和尚は、修験道の行者として「大和の金峰山、奈良の大峰山、紀伊の熊野三山」にて厳しい修行を重ね、了庵禪師に弟子入りします。禪師の世話を一手に引き受け、禪師が転寺すれば常に随行し、献身しました。その後、禪師の元を去り滋賀の三井寺みいじ(園城寺)で自らのさらなる修行と弟子の育成に努めます。

やがて了庵禪師がひとたび最乗寺



最乗寺は、杉の古木に囲まれた広大な山中に建つ厳かな靈域です。

開創の志を立てるや、道了和尚は天狗となつて飛来し、五百人力と言われる神通力で土木・造営工事を担います。こうして一年余りで伽藍が成り、最乗寺が開創されました。

途同じうして、轍同じからず

最乗寺の開創には、お二人の固い師弟関係がうかがわれますが、道了和尚は、なぜ一度了庵禅師の元を離れ三井寺に戻ったのでしょうか。しかもその後、三井寺という修行の場を投げうってなぜ再び了庵禅師の元に駆け付けたのでしょうか。最乗寺の木村陸哉老師に伺いました。

「開山さまは、同途不同轍（途同じうして、轍同じからず）」と言われました。同じ目的地（途）を目指していても、そこに至る経路（轍）はそれぞれ異なつてよい。先達の轍を楽してなぞらず己の道を開くべし、とも受け止められます。お二人はそれぞれの轍を切り開きながら衆生を救う大理想を、深い部分で共感し合っていたからこそ、禅師の一大決心に呼応して道了さまは飛んで参つたのでしよう。」

ところで道了和尚は本当に天狗のように飛んで来たのですかと不躰な質問をしたところ、木村老師は古い記録の一節を教えてくださいました。



「同途不同轍」の教えを語る木村老師。



道了和尚の真筆。最乗寺の宝物殿で保管されています。見学は事前予約制。

「道了さまが三井寺を飛び去つた日の、三井寺学頭の日記にこう書かれています。相模坊道了、人容忽然として天狗に變じ西山窓を開き、飛び立ち以後其姿を見ることなし。世に天狗伝説数あれど、実在した人物として記録が残る天狗はそうおいではないと思いますよ。お望みならば道了さまの真筆もお目に掛けましょうか。」と破顔されました。

最乗寺での20年近い修行生活の後、應永18（1411）年3月に了庵禅師が亡くなると、道了和尚は自らも「以後、山中に在つて大雄山を護り、多くの

人々を利済する」と誓い、「火焰を背負い、右手に拄杖、左手に早繩、蛇を従え、白狐の背に立ち、天地鳴動のうち山中深く身を隠した」と伝えられます。以来、最乗寺の守護神・妙覚道了大薩埵として祀られ、諸願成就の「道了尊」道了さまと、人々の信仰を集めています。



道了和尚が山へ身を隠された当時のいでたちを再現した「道了尊天狗化身像」。平成4年11月造立。



金剛水堂 600年
間滾々と湧き続ける
霊水。このままでも飲める
そうですが、寺務所では
ペットボトル入りが販売
されています。



一擲石 重い石を運ぶ中にも師に呼ばれば、石を置き即座に参する姿は、了庵禅師への信服ぶりがうかがえるエピソードです。



結界門を左右から守る大天狗(右)と小天狗(左)。

結界門の小天狗 道了さまの眷属で神仏の使いとも言われる小天狗(烏天狗)。

鐘楼 この鐘は、昭和の大戦の際に供出されたものが運よく錆つづぶされずに残り再び最乗寺に帰ってきたものだといえます。現在の鐘は三代目です。

今も残る天狗の逸話

境内には天狗となった道了さまゆかりの史跡がいくつも点在します。

まず、本堂をお参りし、左手に進むと金剛水堂と書かれた水屋に滾々と水が湧いています。道了さま自らが井戸を掘っていると地中から御金印が現れました。掘り出したところ地中から「清冽なる泉水が湧出し、以来六百年衆人の活潑を救う金剛水と称して珍重される」と説明されています。

その隣の一擲石は道了さまの了庵禅師に対する孝順を物語る霊石です。寺の建設中に了庵禅師に呼ばれた道

了さまは、手にしていた石を投げ捨てて即座に禅師のもとに駆け付けました。その石がこの一擲石です。

その隣の鐘楼の大きな梵鐘は、道了さまが遠州(静岡県西部)を托鉢中に寄進され、杖の先に下げて最乗寺へ持ち帰ったものとされます。いかにも天狗的な逸話です。鐘楼の柱に彫られた大胆で精緻な彫刻も寺院では珍しい装飾です。

さらに進むと左右の天狗に守られた結界門が現れます。門前の大天狗と小天狗は、「これより内は仏法を誇る者入るべからず」と道了さまの聖域を守る存在です。この天狗は道了さ



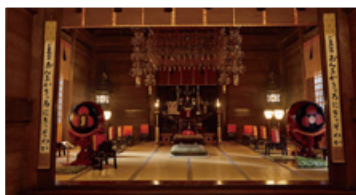
御真殿の庭 十一面観音菩薩は、頭上の10面と本体の顔を合わせて11面のそれぞれが衆生を救うとされ、道了さまの本地仏です。



和合下駄(上) 重さが1000貫(約3.8ト)もある世界最大級の大下駄です。和合下駄の周りには、中小の下駄が奉納されていますが、現在は新規の奉納は受け付けていません。



御真殿と堂内 道了さまを祀る伽藍です。ただし道了さまは今もこの山においてであるとして、最乗寺の役職表では、現在でも筆頭に「監寺 道了和尚」と記されています。



奥の院を守る天狗 最乗寺内で最も古い天狗像が、奥の院を守るこの天狗です。明治24年造立。



御真殿内の大天狗と小天狗 堂内にも天狗の木像があります。



下駄は左右揃って一足となるため夫婦円満の祈願として、また「足が立つように」と子どもの無事成長を願って奉納されてきました。

和合下駄の隣には、道了さまが山に身を隠した際の姿「火焰を背負い、右手に拄杖、左手に早縄、蛇を従え、白狐の背に立ち」を再現した**道了尊天狗化身像**が並びます。

御真殿の先、354段の大階段を上ると奥の院です。大階段の中腹ではまた大天狗、小天狗が参詣者を見守ります。奥の院から見渡すと、最乗寺の寺域の広大さが良く分かります。

まの眷属けんぞくとされています。

結果門をくぐり、右手の77段の石段をのぼると道了さまを祀る**御真殿**です。お堂の奥の厨子の中には道了さまをかたどった木像が祀られています。ここでは道了さまの神通力にあやかりさまざまな願いでご祈祷をお願いできます。

また御真殿の庭にも道了さまにまつわる尊像などがいくつも並びます。左手には大小さまざま下駄が奉納され、中でも推定・世界最大の真つ赤な高下駄・**和合下駄**は、あまりに大きすぎて人の目の高さでは下駄だと認識しづらいほどです。



仁王門 金剛力士が守る最乗寺参道三丁目の仁王門。桜やアジサイなど、季節の花で彩られます。

春の最乗寺は、色鮮やかな花々と萌え立つ新緑に覆われます。

4月には桜が参道を彩り、ツツジやシヤクナゲが鮮やかな色を添え、5月には青葉が輝き、苔むした石段や朱塗りの山門とのコントラストが訪れる人々を魅了します。そして6月にはアジサイが咲き誇り、雨に濡れた花と深緑が静かな趣を醸し出します。

また、自然だけでなく心を整える行事も充実しています。

4月には花まつりが行われ、枝垂桜が咲く中、稚児行列や甘茶かけが催されます。

5月には伝統の法会、大祭御供式が

する中、白装束に身を包んだ3人の僧が、お供えのお櫃を頭上に掲げて、御真殿への石段約百段を駆け上がります。仏教と修験道が一体となる最乗寺ならではの修行風景です。

毎月27日の了庵禅師の月命日に開かれ、5月、9月は、大祭御供式として高僧の法話や音楽家の演奏会のほか精進カレーなども用意され、参詣客でにぎわいます。

6月はお盆の施食会の準備のために大きな行事はありませんが、毎月開催する日曜坐禅会や申込制の研修参籠など、日常を離れて本当の自分と向き合う時間を過ごせます。



最乗寺の御朱印。



清心の滝 滝の上には不動堂があります。不動明王は煩惱を断つ力を持ち修行の場を守護しています。

開かれます。御供式とは、道了さまへお供えを届ける法会です。

夜の境内。法螺貝と梵鐘が響き、結界門の前で僧侶と山伏が声高に読経



巨大な引き戸 幅約2.5mの一枚板の戸(碧落門)。原木の直径は2.5m、周囲は8mほどもあったようです。周辺の巨杉群は県の天然記念物に指定されています。

春の沿線は花ざかり



小田原フラワーガーデン

5月には春のローズフェスタが開かれ、約160品種360本のバラが咲き誇ります。バラ園のほかにもトロピカルな花々が咲く温室やハナショウブ池など。飯田岡駅から徒歩約20分。入場無料。㊤

清左衛門地獄池

清左衛門地獄池は環境省による「平成の名水百選」に県内で唯一、選ばれています。富士フィルム前駅から徒歩15分。



五百羅漢像

玉寶寺の本堂には、像高24釐から60釐の羅漢像526基が、ところ狭しと並びます。五百羅漢駅徒歩3分。㊤



大雄山線駅舎カフェ1の1

大雄山線小田原駅の管理事務所だった建物がカフェになっています。建物や道具はほぼ昭和初期のもので、初めて来たのになつかしい気持ちになるカフェです。10時～17時、不定休。㊤



伊豆箱根鉄道 大雄山線

路線距離9.6km、12駅中8駅が無人駅だがSuicaとPASMOが全駅で使用可能。日中は12～15分に1本運行。大雄山駅は関東の駅百選に認定されています。

㊤=写真提供:神奈川新聞社



菜の花の波間を進む大雄山線。開業100周年を記念して、特別色車両が運行しています。車体前頭部の写真の左から、地域の名産である柑橘類をイメージしたオレンジトレイン、天狗色(赤)の車体に団扇を描いた天狗電車、南足柄市の市の花・リンドウをイメージしたリンドウ電車。㊤



春木径の春めき桜

富士フィルム前駅で下車し、狩川沿いに出ると100本の「春めき桜」が植えられた春木径(はるきみち)です。春めき桜は南足柄市特産の桜です。春木径とは、富士フィルム社長で名誉市民の故春木榮氏を偲んで造られた桜並木です。㊤

大 雄山線は小田原駅と大雄山駅を24分ほどで結ぶローカル鉄道です。1925(大正14)年10月15日に、最乗寺への参詣鉄道として開業し、昨年2025(令和7)年に100周年を迎えました。1973(昭和48)年には乗務員の発案で、日本で初めてシルバースト(現在の優先席)を設けるなど、乗客の気持ちに寄り添う鉄道です。

春の沿線は花ざかりです。

南足柄市で品種登録された「春めき桜」をはじめとして、狩川沿いの菜の花など、花散歩には格好のエリアです。また小田原フラワーガーデンでは、160品種の春バラが美を競い合います。

100年の歴史を刻むレールに身をゆだね、心と体を癒す小さな旅に出かけてみませんか。

建長寺半僧坊



鎌倉五山の筆頭 禅専門道場

建長寺は、鎌倉時代の1253(建長5)年に鎌倉幕府五代執権・北条時頼が創建した臨済宗の古刹で、日本初の禅専門道場です。

南宋の僧・蘭渓道隆(らんけいどうりゅう)禅師を開山とし、厳格な禅の修行制度を整えたことでも知られます。

半僧坊大権現

明治時代の建長寺住職・霄貫道老(せうくわんだらう)師は不思議な夢を見ました。白髪の老人が「某(たれぞ)を清浄の地へ招かばその地は必ず隆盛を致すべし」と告げる夢でも知られます。

貫道老師はこの老人こそ深奥山(じんおうさん)方広寺(ほうこうじ)静岡(しずく)の半僧坊大権現(はんそうぼうたいこんげん)であると直感しました。

半僧坊大権現は、開山の大師を海難から救った逸話があり、また明治14(1881)年の大火災でも半僧坊真殿が焼け残ったことから、その靈験が広く知られ始め、半僧坊信仰が全国に広がりました。

貫道老師は自ら方広寺に出向き、半僧坊大権現のご分身の勧請を願います。そして明治23(1890)年5月、境内の奥の小高く「清浄な地」とされた富士山も相模湾も望める場所に堂宇(どうう)を創建しました。



岩場の斜面に雄々しく立つ天狗像。



半僧坊を守られる池田和尚。



「鼻が長い不思議な老人」として絵馬に描かれた半僧坊。



「大権現」とは、仏や菩薩が日本の神の姿で現れた状態の尊称なので、半僧坊大権現には鳥居をくぐって参拝します。

鼻の長い不思議な老人

半僧坊へ続く石段の途中、低木の植栽が整えられた南向きの岩肌には12体の天狗像が立ち並んでいます。斜面最上段に、激しい表情で法剣を振りかざす大天狗が見えます。

半僧坊のお堂を守る池田伸一和尚を訪ねると「実は、半僧坊様は天狗ではないのです。」と意外なことを言われます。一体、どういうことなのでしょうか。

静岡県の方広寺開創の際に、鼻が長い不思議な老人が「作務を引き受けましょう」と現れました。作務とは寺の

雑事のこと、臨済宗では坐禅に次ぐ大事な修行でもあります。黙々と作務に励む老人を、僧たちは「剃髪せずとも僧のごとし」と言い、半僧半俗であることから彼を半僧坊と呼びました。

やがて開山の大師が亡くなると、この老人も「永劫に寺を守護しましょう」と言い残し山に身を隠します。寺ではこの不思議な老人を寺の鎮守の神・半僧坊大権現として祀りました。参詣の人々も「その昔、半僧坊様は神通力で荒海を沈めたらしい。そういえば天狗のように長い鼻だった。半僧坊様こそはきっと天狗様に違いない」と思わず手を合わせ



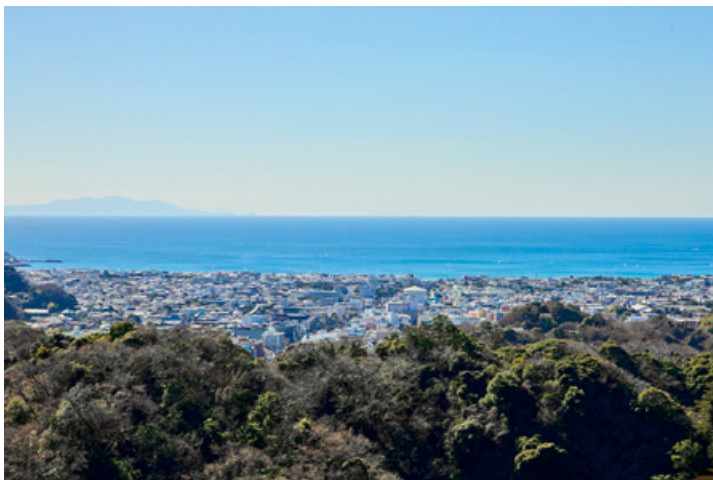
花の建長寺



赤い緋牡丹



ツツジと鐘楼



半僧坊からは、鎌倉の街並みの先に海が見え、天気によければ富士山まで見渡せます。建長寺総門（巨福門）より半僧坊までは、徒歩15～20分、途中約250段の石段を上ります。

たといいます。

「建長寺でも、半僧坊様をお迎えすると半僧坊詣でに大勢の参詣客が訪れ、横須賀線が特別列車を走らせたそうです。貫道老師の夢は正夢となつたんですね。」池田伸一和尚は顔をほころばせ、「やがて熱心な信者さんたちが天狗像を寄進され、半僧坊の境内に12体の天狗が居並ぶことになつたのです。」と、半僧坊大権現と天狗の物語を聞かせてくれました。

「春から初夏にかけては、建長寺の境内が花に彩られるいい季節です。天狗像と花を愛でに、ぜひご参詣ください。」

禅寺の花に癒されるひととき

4月から6月の建長寺は、季節の花々が境内を彩る季節です。

4月は、参道から三門周辺にかけて桜（ソメイヨシノ、山桜、しだれ桜）が見頃を迎え、伽藍が薄い薄紅色に包まれます。例年は3月下旬から4月上旬が見頃です。

5月に入ると境内の随所でツツジが色鮮やかに咲き始め、続いて堂々とした牡丹の花が禅寺に豪華な色彩を添えます。やがてシヤクナゲも見頃を迎え、境内は花と新緑が調和し、散策に最適な季節になります。



写真提供:建長寺



イワタバコ

涼しげな岩陰などに自生する多年草です。



半僧坊の御朱印

6月は建長寺がもつとも花に包まれる季節で、梅雨とともにアジサイが境内各所を彩ります。山アジサイは5月下旬から、西洋アジサイは6月中旬が最盛期です。半僧坊への参道は特に美しい名所です。また、岩場には薄紫のイワタバコが咲き、しっとりとした雰囲気を出します。

建長寺では一年を通して、坐禅会や写経体験、土曜法話の会、仏教の教えに節をつけて唱えるご詠歌の体験会などを催しています。

「無限の清風が吹く」という建長寺。花々に包まれた季節は特に心静まる時間を過ごすことができます。